

日本の名作名文ハイライト

門

夏目漱石

朗読 wis

出所 【朗読】声を便りに、声を頼りに——。

<http://18.art-studio.cc/~koenoizumi/>

teabreak 編

門 夏目漱石

●冒頭部分

宗助は先刻から縁側へ座蒲団を持ち出して、日当りの好さそうな所へ気楽に胡座をかいて見たが、やがて手に持っている雑誌を放り出すと共に、ごろりと横になった。秋日和と名のつくほどの上天気なので、往来を行く人の下駄の響が、静かな町だけに、朗らかに聞えて来る。肱枕をして軒から上を見上げると、奇麗な空が一面に蒼く澄んでいる。その空が自分の寝ている縁側の、窮屈な寸法に較べて見ると、非常に広大である。たまの日曜にこうして緩くり空を見るだけでもだいぶ違うなと思しながら、眉を寄せて、ぎらぎらする目をしばらく見つめていたが、眩しくなったので、今度はぐるりと寝返りをして障子の方を向いた。障子の中では細君が裁縫をしている。

おい、いい天気だな」と話しかけた。細君は、

ええ」といったなりであった。宗助も別に話がしたい訳でもなかったと見えて、それなり黙ってしまった。しばらくすると今度は細君の方から、

ちっと散歩でもしていらっしゃい」といった。しかしその時は宗助がたどうんという生返事を返したただけであった。

二三分して、細君は障子のガラスの所へ顔を寄せて、縁側に寝てい

る夫の姿を覗いて見た。それはどういう了見か両膝を曲げて海老のよ
うに窮屈になっている。そうして両手を組み合わせて、その中へ黒い
頭を突っ込んでいるから、肱に挟まれて顔がちっとも見えない。

あなたそんな所へ寝ると風邪引いてよ」と細君が注意した。細君の
言葉は東京のような、東京でないような、現代の女学生に共通な一
種の調子を持っている。

宗助は両肱の中で大きな眼をぱちぱちさせながら、
寝やせん、大丈夫だ」と小声で答えた。

それからまた静かになった。外を通る護謨車のベルの音が二三度鳴
った後から、遠くで鶏の時音をつくる声が聞えた。宗助は仕立おろし
の紡績織の背中へ、自然と浸み込んで来る光線の曖昧を、襯衣の下で
貪ぼるほど味いながら、表の音を聴くともなく聴いていたが、急に思
い出したように、障子越しの細君を呼んで、

御米、近来の近の字はどう書いたっけね」と尋ねた。細君は別に呆
れた様子もなく、若い女に特有なけたたましい笑声も立てず、

近江のおうの字じゃなくって」と答えた。
その近江のおうの字が分らないんだ」

細君は立て切った障子を半分ばかり開けて、敷居の外へ長い物指を
出して、その先で近の字を縁側へ書いて見せて、

「こうでしょう」といったぎり、物指の先を、字の留った所へ置いた

なり、澄み渡った空を一しきり眺め入った。宗助は細君の顔も見ずに、
「やっぱりそうか」といったが、冗談でもなかったと見えて、別に笑
もしなかった。細君も近の字はまるで気にならない様子で、

「本当にいい御天気だわね」と半ば独り言のようにいいながら、障子
を開けたまままた裁縫を始めた。すると宗助は肱で挟んだ頭を少し抬
げて、

「どうも字というものは不思議だよ」と始めて細君の顔を見た。

「なぜ」

「なぜって、いくら容易い字でも、こりや変だと思って疑ぐり出すと
分らなくなる。この間も今日の今の字で大変迷った。紙の上へちゃん
と書いて見て、じっと眺めていると、何だか違ったような気がする。
しまいには見れば見るほど今らしくなくなって来る。——御前そんな
事を経験した事はないかい」

「まさか」

「おれだけかな」と宗助は頭へ手を当てた。

「あなたどうかしていらっしやるのよ」

「やっぱり神経衰弱のせいかも知れない」

「そうよ」と細君は夫の顔を見た。それはようやく立ち上った。

針箱と糸屑の上を飛び越すように跨いで、茶の間の襖を開けると、
すぐ座敷である。南が玄関で塞がれているので、突き当りの障子が、

日向から急に這入って来た眸には、うそ寒く映った。そこを開けると、
廂に迫るような勾配の崖が、縁鼻からそびえているので、朝の内は当
ってしかるべきはずの日も容易に影を落さない。崖には草が生えてい
る。下からして一側も石で畳んでないから、いつ壊れるか分らない虞
があるのだけれども、不思議にまだ壊れた事がないそうで、そのため
か家主も長い間昔のままにして放ってある。もともと元は一面の竹藪
だったとかで、それを切り開く時に根だけは掘り返さずに土堤の中に
埋めて置いたから、地は存外一緊っていますからねと、町内に二十年
も住んでいる八百屋の爺が勝手口でわざわざ説明してくれた事があ
る。その時宗助はだつて根が残っていれば、また竹が生えて藪になり
そうなものじゃないかと聞き返して見た。すると爺は、それがね、あ
あ切り開かれて見ると、そう甘く行くもんじゃありませんよ。しかし
崖だけは大丈夫です。どんな事があつたつて壊えっこはねえんだから
と、あたかも自分のものを弁護でもするように力んで帰って行つた。

崖は秋に入っても別に色づく様子もない。ただ青い草の匂が退めて、
不揃にもじやもじやするばかりである。薄だの蔦だのというしやれた
ものに至ってはさらに見当らない。その代り昔の名残りの孟宗が中途
に二本、上の方に三本ほどすっきりと立っている。それが多少黄に染
まって、幹に日の射すときなぞは、軒から首を出すと、土手の上に秋
の曖昧を眺められるような心持がする。宗助は朝出て四時過に帰る男

だから、日のつまるこの頃は、滅多に崖の上を覗く暇を有たなかつた。暗い便所から出て、手水鉢の水を手に受けながら、ふと廂の外を見上げた時、始めて竹の事を思い出した。幹の頂に濃かな葉が集まって、まるで坊主頭のように見える。それが秋の日に酔って重く下を向いて、寂そりと重なった葉が一枚も動かない。

宗助は障子を閉てて座敷へ帰って、机の前へ座った。座敷とはいいながら客を通すからそう名ずけるまでで、実は書齋とか居間とかいう方が穏当である。北側に床があるので、申訳のために変な軸を掛けて、その前に朱泥の色をした拙な花活が飾ってある。欄間には額も何もない。ただ真鍮の折釘だけが二本光っている。その他にはガラス戸の張った書棚が一つある。けれども中には別にこれといって目立つほどの立派なものも這入っていない。

宗助は銀金具の付いた机の抽出を開けてしきりに中を検べ出したが、別に何も見つけ出さないうちに、はたりと締めてしまった。それから硯箱の蓋を取って、手紙を書き始めた。一本書いて封をして、ちよつと考えたが、

おい、佐伯のうちは中六番町何番地だったかね」と襖一越に細君に聞いた。

「二十五番地じゃなくって」と細君は答えたが、宗助が名宛を書き終る頃になって、

手紙じゃ駄目よ、行ってよく話をして来なくっちゃ」と付け加えた。まあ、駄目までも手紙を一本出しておこう。それでいけなかったら出掛けるとするさ」といい切ったが、細君が返事をしないので、
ねえ、おい、それでいいだろう」と念を押した。

細君は悪いともいい兼ねたと見えて、その上争いもしなかった。宗助は郵便を持ったまま、座敷から直ぐ玄関に出た。細君は夫の足音を聞いて始めて、座を立ったが、これは茶の間の縁伝いに玄関に出た。

ちよっと散歩に行つて来るよ」

行つていらっしやい」と細君は微笑しながら答えた。